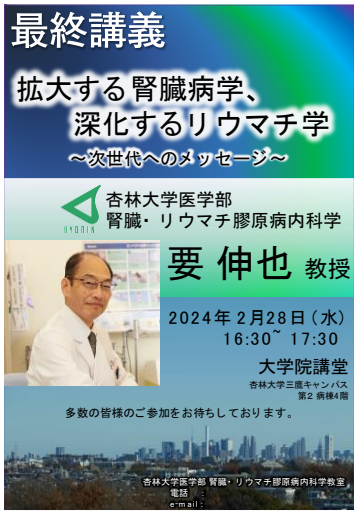
2024 年 3 月 4 日
杏林大学　腎臓・リウマチ膠原病内科

# 杏林大学医学部　腎臓・リウマチ膠原病内科学教授
# 要伸也先生の最終講義が行われました。




本年 3 月で退任を迎える要伸也教授の最終講義が、2 月 28 日（水曜日）16 時 30 分より、三鷹キャンパス大学院講堂で行われました。タイトルは「拡大する腎臓病学、深化するリウマチ学　～次世代へのメッセージ～」でした。当日は要教授と親交のある多くの医師や教職員が参加しました。

要教授は、2007 年に杏林大学に赴任され、2017 年からは腎臓・リウマチ膠原病内科学教室を主宰されるとともに、腎臓学会の理事・編集委員長、第 51 回日本腎臓学会東部学術大会大会長、腎臓病・血管炎分野の複数の研究班等でご活躍されました。

本講義では、はじめに CKD 対策、多臓器連関、老化に関連する Klotho 遺伝子の解明などの腎臓病学の進歩、免疫学における基礎研究の進歩と生物学的製剤の発展などリウマチ膠原病学の進歩について説明されました。そして、ご自身の経験から、症例報告を行うことの重要性、研究者としての基盤となった基礎研究、うまくいくことばかりではなかった米国ラホーヤ癌研究所への留学時代、当時日本で初めて行われた多施設共同二重盲検臨床研究（EVALUATE Study）に杏林大学で携われた苦労などを話されました。また、厚労省研究班等では ANCA 関連血管炎、慢性腎臓病（CKD）、急速進行性糸球体腎炎(RPGN)、非典型溶血性尿毒症症候群(aHUS）、等の多くのガイドラインの作成や改訂に携わり、中心的な役割を担われた経験について紹介されました。

講義の後半では CKD 診療について触れられ、CKD 診療がこの 10 年で大きく進歩し、患者さんの腎予後が改善していることを示されました。その理由として、CKD 概念が定義され、予防法、治療薬の進歩したことが大きく寄与していることを挙げられました。しかし、この恩恵を患者さんにとどけるためには、地域連携、多職種連携が大切であるという思いを話されました。さらに、腎臓病療養指導士制度の委員長として創設から尽力されたことも紹介されました。また、透析医療における地域連携の重要性として、要教授が理事長を務める三多摩腎疾患治療医会を通じた多摩地区での災害対策事業、新型コロナ対策では多摩地区での透析患者受け入れ調整とそのシステムの構築を通じて地域へ貢献されたことなども紹介されました。

最後に、次世代へのメッセージとして、「視野を広く持ちいろんなことにチャレンジしてほしい。迷ったら困難な方を選ぶことで必ず成長がある。論文をしっかり書く努力、メンターをもつこと、一流に触れることは大切である。」と話されました。そして、「Think Global, Act Local.」、「真善美：Science & Art＋善＝それは正しいことを行うということ」、「出会いを大切に」、これらの言葉を次世代へのメッセージとして残されました。

要教授は、腎臓病学、リウマチ膠原病学の進歩に深く貢献されたこと、多岐に渡る業績を改めて知ることができました。要教授ご自身のこれまでの歩みというかたちで本日の最終講義で示された医学に対する姿勢は、私たちの記憶に残るものとなりました。
講義終了後には、要教授の長年のご指導に対して、感謝の言葉とともに花束が贈呈されました。
ご多用中のところ、最終講義へご来場いただいた皆様には、心より感謝申し上げます。

杏林大学　腎臓・リウマチ膠原病内科学教室